

JOY NOVEL

斎藤 栄

タロット日美子

アルプス秘湯推理旅行



アルプス秘湯推理旅行

昭和六十二年四月二十五日 初版発行

著者 斎藤 栄

発行者 増田 義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(五六二)二〇五一(編集)

〇三(五三五)四四四一(販売)

振替 東京一―三二六 千一〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

梅田第一ビル内

TEL 〇六(三一二)一五七三

印刷 東京研文社 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

ISBN 4-408-50074-7

© S. Saito 1987

Printed in Japan



JOY NOVELS

タロット日美子

アルプス秘湯推理旅行

斎藤 栄

実業之日本社

目次

第一章	謎の扉	5
第二章	白の女	29
第三章	犯人は誰？	53
第四章	朝子の場合	77
第五章	噴泉死	101
第六章	台風襲来	125
第七章	不倫の女	149
第八章	不動産屋	173
第九章	悪しき占い	197

カバー絵・イラスト／加藤孝雄
装丁／サン・プランニング

第一章 謎の扉

1

二階堂日美子の家は、鎌倉の材木座海岸にある。南に面して小さな庭があり、庭の向こうには海岸道路が走っている。道路の先は、もう砂浜だった。道路の下に、コンクリート製の小さなトンネルがあるから、そこをくぐると、すぐに海岸へ出られる。

こんな具合だから、ちよつと風の吹く日などには、

もう家のあちこちが、砂のためにザラザラして、埃っぽくなる。

そのせいで、日美子は毎日、掃除をする主婦になつてしまった。だから、日美子の趣味は、学生時代からのタロット占いと家の掃除ということになつていた。

この日も、日美子は、押入れから掃除機のホースを天井裏に入れ、たまつた砂を吸い取つていた。とにかく、この家の砂というのは、恐ろしいくらいで、あらゆる隙間から侵入する。そして、うっかりすると、天井板を曲げるくらいの重い砂がたまつてしまふのだ。

だから日美子は、まめに天井裏の砂を吸い取つておくようにしているのである。

この作業が終つて、日美子が手と顔を洗つているとき、インターホンのチャイムがなつた。出てみる

と、〈新湘南ツーリスト〉の北村夢子だった。

夢子は、旅行社のコンダクターをしているが、日美子とは、高校時代からの友人である。

「午前中から急にお邪魔してすみません」と、夢子は言った。

「いいのよ、丁度、お掃除が終ったばかりだから」と、日美子は笑った。

「ホラ、この間のお話の旅行の件、プランができたので、持ってきたの」

「ありがとう、早いね。見せていただくわ」

日美子は、夢子をダイニングキッチンに案内した。

先日、関東タロット研究会のメンバーが、どこかへ旅行しよう、という話になり、日美子が有志の名を挙げて夢子にプランの作成を頼んだのである。

「……今は、秘湯めぐりというのがブームになっているのよ。だから、みなさんの予定が二泊三日とい

うことでしょう。あまり遠くなくて、しかも、いい温泉でお料理もおいしいということで選んでみたの」

と、夢子は言った。

日美子が、そのプランを見ると、新宿から特急〈あずさ7号〉で出発。アルプスの入口、中房温泉で一泊。翌日は、扉温泉に泊って、帰京するという事になっていた。

「私はいいわ。どちらも初めてだから……」

と、日美子は賛成した。

「よかった、喜んでくれて……」

夢子は、名前の通り、夢を見るような大きな瞳を輝かせた。

「それで……あなたも行つて下さるの？」

と、日美子が訊いた。

「日美子さんを入れて、タロット研究会の人は八名

だったわね」

「そうよ」

「だったら、社長も、私にコンダクターとして行って来ていいと言うの。と言つても……実は一種の研修よ。私もこの二つの温泉地は学生時代に一度、父に連れられて行ったことがあるきりなの……」

「でもよかった……」

「このプランでよければ、私、手続きするんだけど、メンバーは、この間、いただいた通り？ 変更ないかしら？」

「旅程は、一切、私に一任されているから、中房温泉と扉温泉でいいわ。メンバーも変更なしよ」

と、日美子は断言した。

「そうすると、この八名ね」

夢子は、ワープロで打ったメンバー表をテーブルの上に置いた。

そこには、二階堂日美子の名をトップとして、次の七名が名を連ねていた。

大須亜樹子、板倉佳世子、鈴代容子^{すずしろ}、小谷千春、吉池麻土香、金村朝子、水戸陽子……

2

日美子の夫、二階堂警部は、鎌倉署でも評判の名刑事といわれている。このところ、仕事が多忙で、あまり自宅で夜を過ごすことがなかった。

鎌倉は、夏場になると、交通事故をはじめとして、各種の犯罪がふえてくる。九月はその残務整理みたいなことがあつて、二階堂は目が廻るほどだった。

月なかばのある日、二階堂は久々に帰宅した。

シャワーを浴びて、サッパリしてから居間に出てくると、日美子が、

「あなた、私、明後日^{あさって}から温泉へ行つて来ます。いいかしら？」

と訊いた。

「ああ、この間、言っていたアルプス秘湯の旅というやつだろう？ タロット研究会の有志と行く……」

二階堂はちゃんと覚えていた。

「ええ。それよ、二泊三日の……」

「そのくらいなら、別段、構わないよ」

「でも……あなたが、毎日、忙しく働いていらつしやるのに……」

「それはいいさ。それに、あと二、三日で、一応、夏場の懸案事件というのが片付きそうだから、そうしたら、有給休暇をとって、おまえと、どこかへ行くつもりだったんだ」

「本当？」

「本当だよ。しかし、女性同士の旅行というのも、またいいものだろうな」

「今度のは、みんなタロットカードで占いのできる人達ばかりなのよ。趣味が同じだから、話も合うし……」

「それでどうなんだ？」

不意に二階堂が訊いた。

「え？」

日美子が訊き返した。

「その旅行のこと、占ってみたのかい？……」

「どんな風に？」

「楽しいかどうか……」

「それは占わないわよ。だって、気持の合ったお友達と旅行して、楽しくないわけないわ。その上、中房温泉というのは、本当の秘湯で、アルプスの懐^{ふところ}に包まれて、ゆっくりと温泉にひたれるらしいのよ。

扉温泉の方は、とてもお料理がおいしいんですって

……」

「お湯がよくて、食べ物がよければ、まず文句なしじゃないか。おれも行ってみたいくらいだ」

と、冗談めかして、二階堂が言った。

「行けるといいけど……」

「おいおい。そんな女性ばかりのグループの中にはいるのは、こっちからご免だよ。それよりも……そうだな、その旅行先であったことは、なんでも話してもらおうか。そういう約束にしよう」

急に、二階堂はそんな風に言い出した。おそらく、彼も秘湯について、関心を持ったからに違いない。

「ええ。お安いご用だわ。女性というのは、同性同士だと、とても大胆になるものよ。たとえば、今度のプランでも、露天風呂があるので、それにはいつてみたいという人が多いの」

「気持は分かるけど……」

「危ない、というんでしょう？」

「男を挑発するシーンになるのは当然だからね。そして、男の中には、野獣みたいな者もいるから……」

「気をつけるように、私、話をするつもりよ。八人のうち、半分は独身者だし……」

「そういうことは、独身も既婚もありはしないさ。旅の恥は掻き捨てという考えもあるが、女は常に用心しないと。この夏、鎌倉で男に乱暴されて、警察に泣いてきた若い女達は、みんな、『まさか』と言うんだね。自分だけは大丈夫と思ってやられている……」

と、警部は言った。

「まあ……まるで、私達が事件を起こすような言い方ね」

と、日美子は笑った。

二階堂は、

「怪しい男を見つけたら、すぐにお得意のタロットで占ってみたいんだよ」

と、楽しそうに、ハハハと声をあげて笑った。

3

特急〈あずさ7号〉は新宿駅の3番線ホームに、9時25分に入線する。発車は10時丁度だから、ホームに三十分以上、停車しているわけである。

日美子が、9時30分にホームへはいったとき、ホーム上には、コンダクターの北村夢子と、黄色いワンピース姿の大須亜樹子の二人がいて、何か喋っていた。

亜樹子は三十三歳の独身で、今日のグループの中

で最年長だった。

日美子は、〈関東タロット研究会〉の副会長をしているが、亜樹子は書記役で、実際の実務は一人で切り廻している。

「あら。みなさん、お早いのね」

日美子が言うのと、夢子と亜樹子は同時に挨拶した。「吉池さんも来ているわ。彼女、座席に坐っているのよ、もう……」

「そう。だったら、客車にはいつてみるわ」

日美子は、〈あずさ7号〉に乗り込んでいった。

指定座席のひとつに、ポツンと吉池麻土香が坐っている姿が見えた。麻土香は、心なし、暗い表情であつた。彼女は、日美子を見ると、

「あ、二階堂さん」

と言った。

「お早うございます。あなたは、本当に、お早いの

ね」

日美子はそう言って、小さなストライプの旅行カバンを網棚にあげた。

「よかったわ。私、あなたに会ったら、みんなのいないところで、ちょっと相談したいと思って……」

麻土香は三十歳である。強い近眼用のメガネをかけていた。

「相談?……どんな?」

と、日美子は坐りながら訊いた。

「それがね。この一ヵ月くらい前から、私の住んでいるマンションのまわりに、変な男が現われるのよ」

「痴漢?」

「そうでもないの。なんだか、私のことを調べているみたいで……聞き込みよ」

「……………」

「聞き込みって、刑事さんがすることでしょう。あなたのご主人もやっていることじゃない?」

と、麻土香が言った。

「そうね。きつとやっていると思うわ。そうすると、刑事に監視されていると言うの? そんな心当りがある?」

「全然よ。だから、私、気味が悪いの……。あなたは、そういうことに、詳しいと思って、みんなの顔がそろそろ前に、どうしたらいいのか、聞いてみたかったわ」

「具体的に言ってみて?……たとえば、どういうことがあったの?」

日美子が突っ込んだ質問をした。

「まずマンションの管理人のところに電話があって、男の声でいろいろと、私のことを訊いたそうよ。それも二回あって……」

「どんなこと？ あなたの学歴とか財産とか？……もし、そうなら、結婚のための身上調査ということもあるわよ。あなたと結婚したい男性がいて……」

と、日美子が言うのと、麻土香は強く首を振った。

「それだけはないわね。私って、男のひとに好かないタイプなの。少なくとも、三十五歳まではダメよ。占いに、ちゃんと出ているの」

と、麻土香は言った。

「ま、それはそれとして……あとはどんな風なの？」

「お隣りの奥さんに、根掘り葉掘り、訊いて行った人がいるらしいの。多分、同じ男だと思うんだけど」

「でも、それで特にあなたに危害を与えるようなことはないんでしょう？」

「まだないけど、薄気味悪いわ」

「それは分かるわ」

日美子が、更に何か言いかけたとき、二人の女性が姿を現わした。小谷千春と水戸陽子の独身グループだった。

その姿を見て、麻土香と日美子は、話を中断した。
「また、あとで……」

と、麻土香は、目くばせして言った。

「はい」

と、応^{こた}えた日美子は、自然な微笑を浮べて、二人の仲間を迎えた。

4

特急〈あずさ7号〉が発車する五分前までに、全員の顔がそろった。小谷と水戸の二人について、金村朝子が来、一番最後に、板倉佳世子と鈴代容子が



駆けるようにして、ホームから車内にはいつて来た。

特急電車は、定刻に新宿駅を発車した。

八人の仲間は、通路を挟んで、四人ずつのグループになって坐った。コンダクターの北村夢子は、一人だけ別の席に坐ったが、客車内はすいていた。

日美子の隣りには金村朝子が坐り、前側に板倉佳世子、その隣りに鈴代容子という組合せだった。偶然かもしれないが、この四人は世帯持ちである。

一方、独身グループの方は、大須亜樹子を中心に、お喋りを始めた。

電車は、八王子を出ると、石和^{いさわ}まで、ノンストップである。甲府を過ぎると、小淵沢、茅野、上諏訪、岡谷、塩尻というように、こまめに停車する。

途中、夢子は、ブルーガイド版の〈名湯秘湯の旅〉から、関係部分をコピーしてきたものを、参加者全員に配った。

日美子は、そのプリントを見て、中房温泉と扉温泉についての概略を知った。

佳世子が、コピーから顔をあげて、

「中房温泉は、胃腸病にいいと書いてあるわ。私、このところ、胃腸がよくないの。だからゆっくりはいるんだわ」

と、日美子に言った。

「温泉というのは、難かしいものらしいのよ。あまり長くはいると、湯あたり^{ゆあたり}して、かえってよくないんですって……」

日美子が微笑して言った。

「私は扉温泉の方だわ」

と、容子が口を挟んだ。

「私は子供を生んでから、左の坐骨神経痛に悩まされてるの。牽引をやったり、注射を受けたりしたんだけど、ハッキリしなくて、困っているの」

「神経痛の場合、あまり熱いお湯にはいると、かえって逆効果みたいね」

と、日美子が言った。

「日美子さん、よくそんなこと知っているのねえ」

と、朝子が感心して言った。

「晩年の父が、坐骨神経痛で悩まされていたからよ。それでね」

日美子の父親は小説家だった。一日中、坐ったきりの仕事をしていると、どうしても、腰痛に苦しめられることになるのだ。

「温泉で治したの、ご病気は？……」

と、佳世子が訊いた。

「温泉は、最低二十日間ぐらい行かないとダメなのよ。一日や二日では……」

日美子が言った。

「じゃ……どうやって？」

「いろいろやっているうちに、自然治癒という形でなんとかなったみたい。でも、時々、再発していたわ」

と、日美子が、昔を思い出すような目付で言った。通路の反対側にいる麻土香は、時々、日美子の方を見て、その視線が彼女と交差したけれど、何も言わなかった。かえって、日美子の方で、

「麻土香さんの話、もっと聞いてあげなければ……」

と思った。

彼女は、夫の二階堂との約束、

「旅行中に起きたことは、なんでも話す」

ということを思い出して、あらためて、同行者一人一人を見廻した。

「麻土香さんは、あんな風な悩みを持っているし、佳世子さんと容子さんは躰の問題……健康が必ずし